2009年5月27日

出張報告書

京都ＦＤ開発推進センター
深野　政之

日　程：2009年5月23日（土）～24日（日）
行事名：日本高等教育学会第12回大会
出張先：長崎大学（長崎市）
参加者：深野

１．公開シンポジウム「ＦＤの再定義―現在のＦＤ観を問う―」（5月23日）

愛媛大学・佐藤浩章先生、名城大学・池田輝政先生、東北大学・羽田貴史先生の三者による報告に加え、玉川大学・菊池重雄先生の指定討論により、ＦＤ義務化の後の動き、研究成果、実践について議論が行われた。

ＦＤの課題は授業改善だけでなく大学教員のキャリア成長を保障するものである必要があること、教育効果を上げる方策はＦＤだけではなく多様にあることなど、狭義のＦＤに留まらない組織的取組の必要性がそれぞれの報告者から語られた。

会場を交えた討論では、ＦＤ活動を効果的に行うための組織、人材養成と確保、アドミニストレーションの在り方等が話し合われた。

２．受託研究成果報告「日本の大学におけるラーニング・アウトカムズ」（5月24日）

欧米の大学で注目されているラーニング・アウトカムズ評価について、日本の高等教育への適用可能性と、いわゆる「出口管理」の方策について研究成果が報告された。

アメリカでもラーニング・アウトカムズ評価の一形態である統一卒業試験、たとえばＣＬＡの導入実績は少なく、また上位大学ではほとんど卒業試験としては採用されていないとのことである。

日本の大学は伝統的に卒業論文・卒業研究を重視し、日本型のラーニング・アウトカムズとしての位置づけを持っている。また、医歯薬系の学部では卒業試験と国家試験が実質的なラーニング・アウトカムズとして機能している。

反面、社会科学系を中心とした多人数教育を行う学部では、いずれの形態でもラーニング・アウトカムズの導入率が低く、また理工系学部でもＪＡＢＥＥ適用課程以外では、ラーニング・アウトカムは明確に捉えられていないことが多いとの報告があった。

会場を交えた討論では、大学間の学力差や専門分野間の差などにより全国統一卒業試験を開発することは困難であること、欧米と違い卒論・卒業研究が定着している日本でラーニング・アウトカムズを重視する必要があるか、等の意見が出された。

この他、2日間を通して多くの自由研究発表に参加し、発表者への質疑、参加者との意見交換を行なうことができ、有意義な出張であった。

以上